

感謝の定義をめぐって

内藤俊史・鷺巣奈保子、2020

以下の内容は、次の論文の一部に加筆修正を加えたものです。

内藤俊史(2012) 修養と道徳——感謝心の修養と道徳教育. 『人間形成と修養に関する総合的研究、野間教育研究所紀要』、51 集、529－577.

感謝の定義について、さらに一步踏み込んで考えてみます。

なお、諸外国、特に欧米における論議も参考にしますが、英語の gratitude や thank が、日本語の「感謝」や「ありがたい」と同等なのかという問題もあります。しかし、その重要性は認めつつも、ここでは、言語間の差異については対象としません。

1. 行為としての感謝と心としての感謝

感謝は、行為としての面と、心としての面があります。この点について、辞書における記述を出発点として説明をしたいと思います。

「感謝」

ありがたく感じて謝意を表すること。「一のしるし」「心から一する」
(『広辞苑』第6版 岩波書店、2008 年)

この説明では、「ありがたく感じること」と「謝意を表すること」が感謝に含まれています。ということは、それら二つがともなって初めて感謝と呼ぶことができるという意味として解釈できます。言い換えれば、表現されて初めて感謝という言葉が適用することができるということになります。

しかし、次のように批判する人もいますでしょう— 表現されない感謝の気持ちについて話題にすることはあるのではないか。それらは感謝に含まれないのだろうか。

このことは、むしろ感謝の多面性を示しています。つまり、「感謝をする」ことには、感謝の気持ちをもつという心理的な側面と、感謝を行為で表すという二つの側面があり、「感謝」という言葉がどちらの側面を意味するか（あるいは両方を含んでいるのか）は、その言葉の用いられた文脈に依存すると考えられます。

あらためて、感謝のそれぞれの側面の説明を加えたいと思います。

第一の感謝の側面は、個人のもつ感情としての感謝です。私たちは、恩恵を与えてくれたものに対してありがたいという感情をもちます。私たちが、感謝という語から連想する内容の一つは、ありがたいまたは感謝という気持ち、感情です。

感謝の第二の側面は、社会的行為としての感謝であり、ここで仮に「感謝行為」と呼ぶものです。それは、相手に対して感謝を表現する行為であり、他の人に「ありがとう」と言う場合がその典型です。それは、言語学者のオースティン(John, L. Austin)による言語行為論が専ら焦点を当てて分析をした、言語の働きの側面です (Austin, 1962/1972)。

つまり、「約束します」と発言することが、単に私が約束をしているという事実を相手に伝えているのではなく、ある行為の実行の責任をもつことを宣言する社会的行為であるように、「ありがとう」「感謝します」と発言することは一つの社会的行為なのです。相手が施してくれた行為を自分は受け入れること、自分は相手に対して敬意をもつこと等を相手に宣言することになるのです。それは、自分の気持ちを単に記述しているというよりも、相手に対して自分の態度を宣言する社会的な行為なのです。

2. 心としての感謝の性質

これまで、感謝が、心と行為の双方の面をもつことを指摘しました。私たちの主たる関心は、行為としての感謝の背後に想定される心としての感謝です。

それでは、感謝の心とは、どのような心を指しているのでしょうか。言いかえれば、感謝の心と呼ばれるためには、どのような性質をもたなければならないのでしょうか。

18 世紀のイギリスの哲学者－経済学者であるアダム・スミス (Adam Smith) は、道徳的感情に関する著書『道徳感情論』(1759/2003) の作者としてもよく知られていますが、その著書の中で、感謝が適格であるための以下の規準を提案しています (Smith, 1759/2003)。

- a. 感謝される者(恩恵を与えた者)は、望ましいまたは受け入れられ得る行為によって恩恵を与えたこと (恩恵を与えた行為の望ましき)
- b. 感謝される者(恩恵を与えた者)は、他からの強制による行為によって恩恵を与えていないこと、あるいは役割義務に従って恩恵を与えたものではないこと (行為の主体性)

アダム・スミスによる条件は、私たちの常識的な考えにそっていると思われまます。例えば、ある人が不正を犯して援助をしてくれたとき、私たちはその相手に感謝をしたり、感謝の気持ちをもったりすることにためらいを感じるでしょう (a)。また、他から強制されて行われた援助を受けたとしても、その援助者に対して感謝の感情をもつことにはためらいを感じるでしょう (b)。

一方、アメリカ合衆国の哲学者であるロバーツ (Roberts, C. R.) は、これまでの哲学者による論議をふまえて、感謝 *gratitude* の意味につい

て論じています(Roberts, 2004)。ロバーツ は、感謝の定義をすることの難しさを指摘した上で、「感謝」と呼ばれるに値するための十分条件（条件を充たしていれば必ず該当するが、充たしていなくても該当する場合があります）を示すことはできるとして、次のような条件を十分条件としてあげています。

(a)感謝される者は、義務によってではなく相手を助けたいという意思によって助けたこと

(b)感謝をする者は、広い意味での利益を受けたこと

(c)感謝をする者は、負債と愛着の感情を、恩恵を与えてくれた者に対してもつようになったこと

(a) は、次のことを意味しています。感謝される者は、誰かから命令されて恩恵を与えたのではなく、また自分の利益のために恩恵を与えたのではなく、相手を助けたいという意思のもとに恩恵を施していること。また、(b) は、感謝する者が、物質的な利益に限らず、心理的、精神的なのを含めて広い意味での利益を得ていることを意味します。最後に、(c) は、恩恵を与えてくれたものに対する感情を示しています。この感情については、それが多分に主観的な面も否めないため、異なる考えもあり得ます。

たとえば、哲学者のイマヌエル・カント(Kant, Immanuel)は、著書『人倫の形而上学』のなかで、尊敬や敬意が、感謝において重要な要素であることを指摘しています(カント、1797/1969)。カントによれば、もし感謝というものが、受けた恩恵に対する「負債－借り」の感情にすぎないのであれば、「借り」を返せば感謝の感情も消え失せるはずですが、実際にはそのようなことはなく、十分に借りを返したとしても、感謝の感情

はなくならないでしょう。なぜなら、感謝には、尊敬という要素が含まれているからだといいます。カントは、(c) で述べられている感情のなかに、尊敬や敬意という感情を含めるべきであると考えています。

先に述べたように、Roberts は、十分条件として以上の三条件をあげていますが、感謝が必ずもたなければならない条件(必要条件)については述べていません。確かに、Roberts のあげている条件を、必要条件としてみるのには難しいでしょう。例えば、自然に対して私たちは感謝をしますが、自然が、(a) で述べられているように意図をもっていると言い切るのには難しいでしょう。

3. 心理学における「感謝」

それでは、心理学では、どのような心理的現象を感謝として扱っているのでしょうか。初めに、最近の傾向から話を進めます。

21 世紀以降の心理学、特にアメリカ合衆国の心理学の世界では、ポジティブ心理学の影響を受けた定義が広く受け入れられています。以下に、一例として、Tsang (2006)による定義をあげます。

“a positive emotional reaction to the receipt of a benefit that is perceived to have resulted from the good intentions of another” (Tsang, 2006, p. 139) この定義は、感謝という概念について多くの人々がもつプロトタイプ(概念のなかの典型)といえるかもしれません。

しかし、感謝の心がポジティブな反応であるということに、物足りなさを感じない人もいます。つまり、感謝という言葉には、ポジティブな感情だけではなく、助けてくれた人への負債感を初めとした様々な感情が含まれているのではないかという懸念です。

感謝をポジティブな感情とする傾向は、20 世紀後期から始まるポジティブ心理学の影響によると考えられます。ポジティブ心理学とは、20 世紀後期、アメリカの心理学会の会長であったセリグマン (Seligman, M. E. P.) が提唱した心理学研究の方向であり、従来の心理学が不適応や疾病に対して、もっぱら焦点を当ててきたことに対して、幸福や希望などの人間のポジティブな側面についての研究の重要性を唱えました。ポジティブ心理学の主張を背景に、ポジティブな感情としての感謝に光が当てられることになり、21 世紀以降、アメリカ合衆国に限らず多くの国々において研究が行われています。

なお、Macullough ら(2001)によると、感謝が心理学において見過ごされてきたという点は、他の多くのポジティブな感情にもいえることですが、感謝に固有な理由も考えられるといいます。すなわち、援助を受けたときに感じる感謝は、心理的負債感等の他の感情に還元されてしまったこと、また、感謝が礼儀の一つとして理解され、そのため社会のあり方に起因するものとみなされ、心理学ではなく社会学の対象に相応しいと考えられてきたためだといえます。

私たちは多様な感情を経験しますが、そのなかの一部である「ポジティブな感情」としての感謝は、心理学ではあまり関心をもたれてはきませんでした。それは、アメリカ合衆国に限らず、日本を含む多く国々においても同様です。その意味で、ポジティブな感情としての感謝にあらためて光を当てることの意義は大きいと考えられます。

しかし、他方で、感謝の心のなかに負債感等の感情を含めるべきであるという考えもあります—感謝はポジティブな感情とともに負債感などを含む総体としての感情であり、様々な要素を含む全体としての感謝のあり方を探究する必要があるという考えです。

感謝と呼ぶ対象をポジティブな感情に限定するべきか、それとも感謝をより広く負債感等を含むものとするべきかは、難しい問題です。しかし、確かなことは、恩恵を受けたときに、多くの場合、ポジティブな感情とともにネガティブな感情が経験されることであり、それらの間の相互作用の解明が求められていることです。

文献

Austin, L. J. (1962/1978). *How to do things with words*. New York: Harvard University Press. (坂本百大訳. 言語と行為. 大修館書店、1978 年) .

Kant, I . (1797/1969). *Die Metaphysik der Sitten*. Königsberg :Bey Friedrich Nicolovius. (吉沢伝三郎・尾田幸雄訳. カント全集第 11 巻 人倫の形而上学. 理想社, 1969 年).

McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. E. & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249–266.

McCullough, M. E. (2002). Savoring life, past and present: Explaining what hope and gratitude share in common. *Psychological Inquiry*, 13(4), 302–304.

Roberts, C. R. (2004). The blessings of gratitude: A conceptual analysis. In R. A. Emmons & M. E. McCullough (Eds.), *The psychology of gratitude*. New York: Oxford University Press. (pp. 58–78).

Tsang, J. A. (2006). Gratitude and prosocial behaviour: An experimental test of gratitude. *Cognition & Emotion*, 20(1), 138-148.

Smith, Adam (1759/2003). *The theory of moral sentiments*, first edition. London: A. Miller. (水田洋訳. 『道徳感情論』, 岩波書店. 2003 年).